

報告 2010. 8. 27

1 環日本海拠点都市会議に参加

8月27日、吉林省延辺朝鮮族自治州の延吉市で環日本海拠点都市会議が開かれました。毎年持ち回りで開催されるこの会議は今年で16回目を数え、日本、中国、韓国、ロシアから計11の都市及び地区が参加。日本からは鳥取市、米子市、境港市の3市、新潟市はオブザーバーとして参加しました。環日本海に位置する拠点都市間でこの地域の交流をどのように発展させるかについて意見を交換する場として、1994年に第1回会議が米子市で開催されました。

今回も参加市長の意見発表の他、市長間で意見を交換する場もあり、そこでは青少年交流の促進の必要性が話し合われ、来年の実施に向け今後参加意向のある都市間で詰めていくことが確認されました。また、来年の第17回会議は日本の鳥取市で開催されることも決まりました。

延辺州の都市や韓国の東草市の関係者からは、新潟とそれら都市を結ぶ日本海横断航路再開への期待の声を聞くことができました。

ここ数年、新潟市と延辺州及び州内の各都市との交流は盛んになり、訪問団の相互派遣や商談会への相互出展などが行われています。(近藤)



10市の代表が備忘録に署名

報告 2010. 8. 30

2 2010北東アジア発展フォーラムに参加



2010北東アジア発展フォーラム

2010北東アジア発展フォーラムが「新しい経済・新しい協力・新しい発展」をテーマに、遼寧省瀋陽市で8月29日夜の歓迎レセプションをもって始まりました。

翌30日と31日に行われたフォーラムは、開幕式及び地域協力ハイレベル会議、新興産業の発展と投資会議、そしてエコロジー都市の建設と投資協力会議の三つからなり、中国国内、日本、韓国などから関係者が招かれ、それぞれのテーマのもと発表がありました。地域協力ハイレベル会議には、今年瀋陽市との友好都市関係30周年を迎えた札幌市の市長の他、長崎市長、佐世保市長が演壇に立ち、都市間で行われている多様な協力関係を例に挙げ、その重要性を訴えました。(近藤)

在瀋陽日本地方自治体交流プラットフォームが正式に開館

北東アジア発展フォーラムの開催に合わせ、8月31日在瀋陽日本地方自治体交流プラットフォームの開幕式が市内の北方国際傳媒中心(メディアセンター)で開かれました。今年5月30日仮オープンしていたもので、3か月間の準備期間を経て情報発信の態勢を整え、この日を迎えました。

傳媒中心(メディアセンター)は市内の目抜き通り青年大街に面するビルで、プラットフォームはこの4階に入っています。各自治体との交流を促進する窓口となる事務所スペースと自治体を紹介する常設展示場からなっています。事務所には日本語のできる職員が常駐しており、自治体の基本情報の紹介、貿易投資情報や観光情報の提供などを行います。

新潟市も展示場にコーナーを設け、来場者に新潟をPRすることにしました。

今後の課題としては、各自治体がこのプラットフォームに有益な情報を適宜提供でき、そしてこのプラットフォームがそれを瀋陽市の関係機関や情報を求めてやって来る人たちに伝えるなどかけ橋の役割を如何に果たせるか(将来的には東北三省各地)が挙げられると思います。(近藤)



あいさつをする駐瀋陽総領事館の松本総領事



テープカットする関係者
地方自治体を代表し、上田札幌市長が登壇しました(右から4人目)

市報新潟掲載記事 (9月5日号)

「県人会」という居場所

ふるさとは遠きにありて思ふもの・・・。

新潟から遠く離れたここ北京でその「ふるさと」を思い起させてくれる居場所が「北京新潟県人会」です。会員は約70人。会社員、自営業、留学生など新潟に縁のある方、新潟大好きな方が2か月ごとに交流会を開催しています。1996年の発足以後、8月の開催でなんと75回を数えました。

私は4月の北京事務所着任後に入会し、現在、会の事務局を担当しています。会は毎回、日本酒を片手に、時折出る新潟なまりを交えながら、新潟のローカルな話題から北京での生活や仕事の情報交換まで、時間があっという間に過ぎてしまいます。先回は新潟明訓高校の甲子園での活躍の話に花が咲きました。

新潟とのつながりを再認識でき、日々の緊張から解放してくれる「ほっ」とできる居場所です。

折しも今月25・26日に、国内外の各新潟県人会が新潟市内に一堂に集う「新潟県人会大交流祭」が朱鷺メッセで開催され、北京からも数名が駆けつけることにしています。市民、県民の皆さんも参加できる楽しいイベントです。会場でお会いできるのを楽しみにしています。(佐藤)

2010. 9. 2～9. 6

第6回北東アジア博覧会が長春で開催

第6回中国吉林・北東アジア投資貿易博覧会(北東アジア博覧会と略称)が9月2日から6日にかけて中国吉林省長春市の国際会議展示センターで開催されました。この博覧会は中国商務部、国家發展改革委員会、吉林省人民政府が主催し、北東アジア六カ国(中国、日本、北朝鮮、韓国、ロシア、モンゴル)が一堂に出展する唯一の国際的な地域総合展示会です。

吉林省は中国の旧工業基地であり、昔は機械製造や冶金等が産業の中心でしたが、近年、その中心が自動車及び自動車部品の製造、農産品加工、生物製薬、ハイテク技術の開発などに移行しつつあります。

日系企業が集中する展G示館(展示館はA～Gの7館)には、トヨタ自動車、住友商事、豊田通商等大手企業のほか、新潟県、宮城県、島根県、岩手県等、日本の自治体も地元企業と共に出品。今回、新潟県からは3企業が出品し、洋服、厨房用品、美容石鹸などを展示しました。

報道によると、今回の博覧会で海外貿易契約金額と中国国内貿易契約金額がそれぞれ5.85億米ドルと16.1億人民元に達しました。また、今後、吉林省は海外から23.74億米ドルに相当する投資を受け入れることになりました。

第7回北東アジア博覧会は2011年9月に同会場で開催される予定です。(鞠)

2010. 8. 28～8. 30

第6回延吉・図們江地域国際投資貿易商談会に出品

第6回延吉・図們江地域国際投資貿易相談会が8月28日から30日まで吉林省延辺朝鮮族自治州延吉市にて開催されました。

会場となった延辺国際コンベンションセンターには約230のブースが設置され、先端技術(機械設備・電子・IT)、保健・美容品、紡績・服飾などの分野で26カ国(地区)から多数の企業が出品しました。日本からも新潟県・市のほか、鳥取県の企業も出品していました。新潟市からは今回4企業が出品し、移動式昇降機、日用品、美容品などを出品しました。当事務所も新潟市の観光資源、農産物などをDVDやパンフレットなどでPRしました。県市のブースを合わせると計9ブース。日本からの出品では昨年に続き最も多いブース数となりました。

延辺テレビ局やラジオ放送局などのメディアがブースに取材に訪れたり、週休日の28、29日の両日には企業関係者のほか一般市民も大勢に来場するなど、今回の商談会に対して現地では高い感心があるように思われます。

報道発表では会期中約7000名の入場者があったとのこと。引き続き経済交流拡大のため活動していきたいと思えます。(斬)



展示商品を問い合わせている来場者



新潟市の観光資源をパンフレットでPR

都道府県紹介講演会シリーズに参加

7月29日、日本国際交流基金日本文化センター主催による「都道府県紹介講演会シリーズ」に新潟県をPRするため講師として参加をした。在中国都道府県自治体職員が出身地の主な観光名所や特産品及び伝統文化などを中国の方に紹介しながら、観光客誘致を図るもので、同月22日の島根県に続きシリーズ2回目の開催であった。(3回目は8月18日の北海道)

テーマは「越後美人の郷-新潟」。日本三大美人の一つとして美人が多い事でも有名な本県。コシヒカリ米、日本酒、温泉など従来の観光キーワードとは少し違う、新たな切り口で新潟の魅力をPRしようとしたものだ。

当日の参加者は120余名と私の予想を上回り、多くの北京市民が参加をしてくれた。参加者の中には、昨年のNHK大河ドラマ「天地人」に魅了され、新潟県内の上杉謙信や直江兼継などの戦国武将縁の地を一人で旅行したことがある若い女性の姿もあった。このような歴史好きな女性のことを、近年、日本では「歴女」と称しているが、ここ北京にも居たことに大変驚かされた。また、後日、主催者から聞いた話では「シリーズ3回中、新潟シリーズが男性の参加者が一番多かった」とのこと。テーマに「美人」が入っていたためだろうか？

当日は夏の雰囲気を出そうと、衣装は団扇片手に浴衣に雪駄といった典型的な日本の「祭スタイル」で登場した。講演の内容は、新潟県、新潟市の観光DVDや佐渡市を拠点に活躍している和太鼓集団「鼓童」のプロモーションDVDを上映したり、80枚ほどのパワーポイントデータにより県内の四季折々の観光スポットや美味しい食べ物・日本酒、漫画・アニメなどを紹介した。講演テーマである「越後美人」については、その由来の説明や古町芸妓、県内出身の有名人などについても紹介をした。講演の合間には参加者全員による、新潟県に関する「新潟クイズ」を行うなど会場は大いに盛り上がった。

参加者からは「なぜコシヒカリ米は美味しいのか?」、「新潟市中心部のマンションの販売価格はいくらか?」、日本の神社仏閣に関心がある男性からは「新潟には有名な神社があるか?是非、新潟へ行ってみたい。」など幅広い質問が寄せられ回答に苦慮する場面もあった。

今回の講演は、北京市内において「新潟」の認知度UPに少なからず寄与できたものであったと自負している。

今後も機会があればマイクを握りたいものだ。(佐藤)



景品の県内産日本酒を目指して盛り上がった「新潟クイズ」



県内出身の有名人を紹介



西園寺 一晃先生の

中国問題リポート

NO.19

ホットな2つの話題

世界同時金融危機を短時間で克服した中国だが、その過程で中国経済の力強さと問題点が同時に明らかになった。一言で言えば、中国にはまだ内陸部を中心に歴大な内需が眠っている。これを掘り起こすことに成功すれば、中国経済はまだまだ発展する余地は充分にある。一方で、中国経済はいま曲がり角に立っている。これまでの輸出、外資導入を中心とした外需型成長は行き詰まりつつある。これを内需型の成長に転換しない限り、中国経済の持続的発展は厳しくなるだろう。

以上のような深刻な問題をも内包する中国経済ではあるが、一般国民（主に都市住民）の間ではあまり危機感はなく、現状にはほぼ満足し、将来への期待も大きい。そういう中で、今大きな話題となっているのは、一人っ子政策の見直しと一人っ子2世の誕生。もう一つは海外旅行ブームだ。

一人っ子政策が決定されたのは1979年で、具体的に施行されたのは80年代に入ってからである。一人っ子政策が施行されてから、中国の出生率はぐんと減った。それまではどこに行っても子供の姿が目立ったが、徐々に少子化が進み、街や公園でもあまり子供の姿が目立たなくなった。ところがここ数年、やたら子供の姿が目立つようになった。公園などには、ベビーカーに子供を乗せた中高年の女性の姿を良く見かける。中国は共働きが多いので、昼間は託児所や保育園に子供を預けるケースが多いのだが、ベビーカーを押している中高年の女性は祖母か子守専門のお手伝いさんである。

実はいま中国では出産ラッシュなのである。1949年の建国以来何度かのベビーブームがあったが、中国はいま第4次ベビーブームに入っている。1980年以降生まれた「一人っ子1世」が産適齢期に入ったのだ。このベビーブームは2005年あたりから始まり、約10年続くと言われる。ここ数年では「猪年（猪は中国ではブタの意味。日本ではイノシシ年だが、中国ではブタ年）の金のタマゴ」、「北京五輪記念ベビー」で、その年は特に出産が多かった。多くの地域では、一人っ子同士の夫婦は、実質的に2人まで生んで良い。これは実験的「試行」であり、法的には一人っ子政策は変わっていない。「一人っ子2世」はベビーブームの10年間に、年平均1600万—1800万誕生すると言われる。学者だけでなく、国民の間でも次のような議論がホットに展開されている。①一人っ子政策を撤廃すべきか否か。②一人っ子1世は「小皇帝」と言われ、「4対1」（両親と祖父母に溺愛される）の結果、わがままで軟弱であることが社会問題となっていた。2世は「6対1」（両

親と両方の祖父母）と言われている。一体どういう人間に育つのか、またどのような教育が必要なのか。③1世は消費志向が強く、古い世代に比べ贅沢である。さらに2世が生まれ、これから勤労人口の多くが一人っ子になって行く。その時、中国の消費構造はどう変化してゆくのか。④中国は将来的には少子高齢化が進み労働力不足が起きるが、当面の問題は、軟弱な一人っ子は3K職場には就きたくない。今後農民の生活が向上し出稼ぎ農民が減れば、製造業や建設業で労働力の不足が現実化する。これは外資導入にも大きく影響する。この問題をいかに解決するのか。

さて、もう一つのホットな話題は海外旅行。特に大都市では海外旅行がブームになりつつある。これまでは富裕層が海外旅行に出かけたが、徐々に中間層にまで広がりつつある。このブームを後押ししているのは、中国の外貨準備の急膨張、富裕層の増大、中間層の形成、各国の中国観光客誘致合戦である。

1999年に約950万人であった中国人出国者は、2008年には約4600万人になり、今後は急カーブを描いて増えると予想される。特に日本への観光志向は確実に高まっている。2008年のある調査によると、日本に「非常にいきたい」、「いきたい」が計54%だったのが、今年の調査では60%を超えた。主な理由は「日本人の親切さ、礼儀正しさ」、「自然の美しさ」、「和食への興味と食品の安全性」、「治安の良さ」、「家電、カメラ、化粧品など買い物への魅力」など。若者の間では圧倒的に「日本発のポップカルチャー」が人気だ。さらにここ数年の対日感情の好転も追い風となっている。

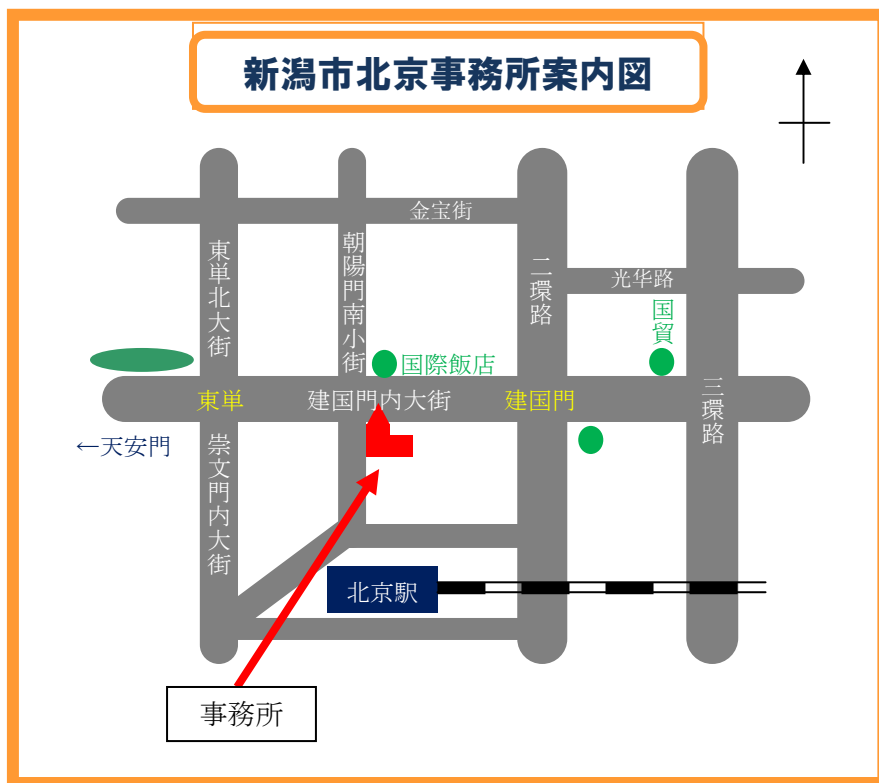
日本は中国人観光客へのビザ発給条件を緩和したが、各国とも中国人観光客誘致にさまざまな方策を取っている。韓国はマルチビザ取得の条件を緩和、期間も1年を3年に延長した。アジアでは日本、韓国、ASEANが三つ巴で中国人観光客の争奪を始めた。観光資源豊富な、そして中国総領事館もできた新潟も、この機会を逃す手は無い。

【筆者プロフィール】

西園寺 一晃（さいおんじ かずてる）氏

1944年生まれ

- 明治の元勲・公爵・首相・枢密院議長である西園寺公望氏を曾祖父に持つ。
- 西園寺公一（きんかず）氏（第一回参議院議員・日中文化交流協会常任理事）の長男。
- 北京大学経済学部卒業
- 朝日新聞社に在籍中は、日中関係の調査研究室長などを歴任。退職後も中国問題の調査、研究にあたる。
- 現在工学院大学客員教授、北京大学客員教授、伝媒大学客員教授、北京城市大学客員教授



北京市東城区建国門内大街18号

恒基中心1号楼 704室

TEL +86(10)6517-2460/3340

FAX +86(10)6517-8687

<http://city.niigata.org.cn>